

経済科学部の思い出

平 木 秀 作*

太田学部長から、「経済科学部開設20周年記念と井上先生・北原先生・廣光先生・藤田先生の退職記念という二重の慶びを記念して、『経済科学研究』特別記念号を刊行するに当たり、経済科学部の思い出について寄稿をお願いしたい」旨依頼がありましたので、僭越とは存じますが一筆したためます。

この度は、経済科学部開設20周年並びに井上先生・北原先生・廣光先生・藤田先生定年ご退職おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。少子高齢化が続き、大学の選別がより厳しく、かつ、社会的ニーズの変化がより早くなる中で、経済科学部が着実にその地歩を固め、発展の一途を辿っていますのは、ひとえに学部構成員の皆様の日頃のたゆまぬ研鑽によるものと敬意を表します。私は、2003年4月から2013年3月までの10年間、ちょうど学部開設期間の二分の一、在職いたしました。私の在職期間中の2007年に学部長として学部開設10周年記念事業を行いましたので、当時を懐かしく思い起こしております。私の在任期間中の一番の思い出は、なんといっても文科省が推進する「21世紀COE」（「トップ30」の別名）プログラムへの挑戦でした。着任当時、既に兒玉学長（当時）、廣光学部長（当時）のリーダーシップのもと、経済学が進化した学問としての経済科学を旗印に「トップ30」目指して教育研究体制が整えられ予算獲得に挑戦していました。最初の挑戦では惜しくも採択されず、捲土重来を期して、審査委員から指摘された課題に取り組んでいました。兒玉先生からは、大学院の教育研究実績と教員の教育研究実績を充実するため、(1) 大学院学生の定員確保と(2) 英文モノグラフの刊行が指示されていましたが、私が着任した2003年は、大学院経済科学研究科博士後期課程が設置された年で、早速、社会人学生1名を受け入れて研究指導に従事しました。この年は、博士後期課程の学生が7名（定員4名）入学し、その後の定員充足率算定に大いに貢献しました。2004年に研究科長を拝命し、同年10月「中国経済成長の新段階」をテーマに博士課程開設記念国際シンポジウムを開催しました。この国際シンポジウムは、その後の中国の著しい経済発展を予告する先進的内容だったと思います。英文モノグラフシリーズの刊行はCOEプログラム再挑戦の「目玉」に位置づけられ、兒玉先生のご指導の下、学部の総力を挙げて取り組み、2005年2月、九大出版会から最初の2冊を刊行する運びとなりました。以後、計10冊刊行されて数々の貴重な成果を挙げています。大学

* 広島修道大学名誉教授。2004年4月-2006年3月、経済科学研究科長。2006年4月-2010年3月、経済科学部長。

院学生の研究指導については、私個人は在職中の10年間に博士前期課程4名、後期課程3名、計6名（内1名は、前期・後期重複）を指導させていただきました。文科省が21世紀COEプログラムの申請制度を変更したため再挑戦はかないませんでした。学部20年の歩みの中で、COEプログラムへの挑戦の遺産は大きかったのではないかと考えています。経済科学部在職中、学部構成員の皆様と充実した日々を過ごすことができましたことを、改めて厚くお礼申し上げます。末筆ながら、経済科学部の一層のご発展と、構成員の皆様の益々のご活躍を祈念いたします。

経済科学部開設20周年に寄せて

廣 光 清次郎*

経済科学部は、多様化・複雑化する経済現象や高度な情報処理技術の進展に伴い、経済科学の手法と経済学の有機的融合を目指して、1997年4月全国初の学部として発足した。新設学部の母体とした商学部管理科学科は高度経済成長と情報産業の急速な技術革新を背景に商学部第3の学科として全国に先駆けて1969年4月開設されたものである。しかし、管理科学科では独自の大学院専攻を持たずこの充実が関係教員の念願の一つであり、この思いは経済科学研究科前期・後期の2専攻として2000年に実現される。

さて、戦後生まれの私たちは、アニメ映画「この世界の片隅に」にも描かれているような、至るところ戦災の爪痕の残る街の中で育ち、皆同じように貧しかった。その後日本は「戦争を仕掛けない」という平和の中で右肩上がりに経済を発展させた。団塊と呼ばれる世代がコンピュータや情報通信技術の発展をつぶさに体験し、その恩恵を享受できたのは幸せなことだった。20世紀後半のコンピュータとインターネットの時代は第3次産業革命と呼ばれ、2010年頃からは世界は既に、IoT、AI、ビッグデータなどのキーワードで特徴づけられる第4次産業革命の時代に突入している。

インターネットの元となる新しいネットワークは1969年誕生の4つのコンピュータを相互接続した実験ネットワーク ARPANET に始まる。一方、現在のすべてのコンピュータの思想的淵源となった IBM システム/360 が発表されたのは1964年である。当時の計算センターの構造が物語るように、コンピュータの管理者と利用者の仕切りが明確で高い壁が存在した時代であった。しかし、このような不自由な状況に満足できない若い研究者たちが求めていた道具立てとしてミニコン/ワークステーションや UNIX の登場、インターネット・プロトコル TCP/IP の誕生がある。TCP/IP の仕様決定は1974年であるが、同じ年、日本においても国立大学のメインフレームを相互接続しようという独自の「N1大学間ネットワーク」が提案されている。前者は今日のインターネットに繋がり、後者は20世紀を乗り越えられず消滅してしまう。ご存知の通り、インターネットには ISO や JIS のような「標準規格」は存在せず、膨大な数の通信規約の提案 RFC (Request for Comments) があり、IETF の統制下にあるがそれ自体何の拘束力もなくまた実装方法も自由である。ちなみに最初の RFC 1は1969年発行で、2017年9月現在 RFC 8250まで登場している。数多くの RFC の内インターネット上で

* 広島修道大学名誉教授。2002年4月-2006年3月、2010年4月-2014年3月、経済科学部長。2006年4月-2010年3月、副学長。

多くの人々が使うものが生き残りさらに発展するといった具合である。一方、N1ネットワークは当時の日本の大型コンピュータメーカーのみのクローズドな仕掛けであり、このような枠組みが国際的に受け入れられるはずもなかった。

丁度、PC-VAN や Nifty Serve などのパソコン通信が普及し始めた1989年（平成元年）、本学商学部へ赴任することになった。研究上の必要性から自宅から300bps のモデムで前任校に接続して情報を得ていたが、月の電話代が5万円を超えたと苦情が来るようになった。早速、当時の総合研究所（現、ひろしま未来協創センター）の調査研究費を申請してワークステーションを導入し、1990年6月には第2研究棟3階の研究室から現在のインターネットの原型の一つである JUNET への接続を果たした。中四国の私立大学では最も早期のインターネット環境の実現であった。その後の発展は目覚ましく今日へと繋がるのである。通信速度だけ見ると、1995年以来20年間で研究室や学内基幹 LAN は100倍、対外接続は5,000倍にもなる。20世紀の終わりには IPv4 アドレスの枯渇と IPv6 の必要性が議論され始め、私自身も1999年に次世代実験ネットワークへ参画し、同じ頃経済科学研究科の開設記念シンポジウムのインターネットマルチキャスト（MBone）を実施した。IPv6 の特徴としては、そのアドレス空間の膨大さ（ 2^{128} ）、セキュリティ対応（IPsec）のみならずプラグ&プレイ機能がある。これらが IoT に適しているとされるが、アドレス拡張の方法は様々存在し、IoT の世界では多様なネットワークの混在となるようである。わが家では家内がスマートホンに替え、自分の声でキーワード検索している。音声認識の性能は1980年代末には特定話者特定語彙であれば既に認識率95%超まで到達していたが、非特定話者・語彙となると性能が著しく低下して、これはテンプレートになるデータベースを改善することが必要と言われていた。今日、ビッグデータの時代になってこれが実現したということである。ビッグデータとは量的変化が質的变化をもたらすという唯物弁証法の証左の一つなのだろうか。AI について一体何のために研究するのか、J. ワイゼンバウムの警告を紹介しておこう（秋葉忠利訳、「コンピューターパワー」、サイマル出版、1979年）。「コンピュータにあることができるかどうかは別にして、コンピュータにさせるべきでない仕事がある」。人は死ぬから頑張り獲得した知識を伝えるようとする。AI は死ぬことなく知識を獲得し巨大化し続ける。そのうち AI 自身が自らの哲学と進化論を構築し始めるかも知れない。第4次産業革命の社会は SF もどきのかなりスリリングなものになるに違いない。

経済情報学科の前身である商学部管理科学科は2004年3月をもってその教育使命を終えたが、累計4,032名の卒業生を輩出した。特記して記憶の中に留めたい。最後に初代学部長とその後学長を務められた本学名誉教授兒玉正憲先生を始め、ある時期、苦楽を共にした教職員各位に深甚なる謝意を表す。

謝 辞

——20周年記念フォーラム開催に際して——

経済科学部長

太 田 耕史郎

経済科学部は1997年に経済学と情報科学を融合した新たな経済教育・情報教育を理念に掲げ、現代経済学科・経済情報学科の2学科で開設され、2017年3月末をもって満20年を迎えた。現在、両学科の学生定員は115名、在学生数は約1,000名で、この間に社会に巣立って行った卒業生は約5,000名に上る。また、これまで経済科学部に所属した教員は約60名、経済科学部を担当した教務課職員は約20名となる。在学生・卒業生・教員・職員、これら全員の真摯かつ熱心な取り組みが経済科学部の歴史を刻んで来た。

5月20日には開設20周年を経済科学部と関係を頂いた多くの方々と共に祝い、また過去20年を振り返りつつ、今後の経済科学(部)の教育・研究の在り方を模索する、あるいは経済科学部が試験的に導入する新たな形態の授業をご覧頂くために、本学協創館(8号館)において記念フォーラムを開催した。フォーラムはA会場の学生主体のワークショップ『ナッシュとパレートを探して』と、B会場の教員中心のシンポジウム『経済科学の現在と未来』から構成された。A会場では「特殊講義(経済システム科学特講)」を履修する31名の学生がゲーム理論をテーマにグループワークを実施、卒業生や教職員の方々にも見学にお越し頂いた。B会場の第1部では学部の基礎を築かれた名誉教授の先生方にご登壇頂いた。第2部は若い教員が主に教育のあり方について白熱した議論を展開した。私もパネリストの1人として大いに楽しませて頂いた。また、シンポジウム開始時には市川太一学長からご挨拶を、終了前には初代学部長(後に学長)の兒玉正憲先生からお言葉を頂戴した。お蔭をもって、写真撮影や懇親会を含め、記念フォーラムを無事に終了することができた。ご来場あるいはご支援くださった皆様に、衷心からお礼申し上げたい。

次は開設30周年記念事業であろうか。大学での教育・人材育成に対するニーズが多様化する中で、学部の更なる発展を期して参りたい。引き続き、多くの方々のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

献 辞

——井上先生・北原先生・廣光先生・藤田先生のご退職に際して——

経済科学部長

太 田 耕史郎

井上 徹教授，北原宗律教授，廣光清次郎教授そして藤田哲雄教授は，2017年3月31日に定年を迎えられました。広島修道大学経済科学部は，先生方の教育，研究，学部運営等における長年のご功績に敬意を表し、『経済科学研究』第21巻第1号・第2号合併号を，「経済科学部開設20周年記念号」とすると同時に，「井上教授・北原教授・廣光教授・藤田教授退職記念号」として刊行致します。以下，先生方のご経歴，お人柄等を簡単にご紹介致します。

井上教授は1969年3月に京都大学工学部を卒業され，三菱電機株式会社にご就職後，株式会社高度移動通信セキュリティ技術研究所ご勤務を経て，本学に2001年4月に経済科学部経済情報学科教授として赴任されました。学部では「情報ネットワーク概論」，「情報ネットワーク演習」，大学院では「情報通信研究」，「情報ネットワーク特殊研究」等の科目を担当されました。1986年には大阪大学で工学博士の学位を取得され，また1975年3月から2年間は米国COMSAT研究所で研鑽を重ねられました。普段は真面目一辺倒なお姿ながら，大学や学部・大学院の懇親会では度々，ご自慢の喉をご披露くださいました。学生の間でも，大変楽しい先生との評判でした。

北原教授は1972年3月に慶應義塾大学法学部を卒業，1984年3月に明治学院大学大学院法学研究科博士後期課程の単位取得を経て，本学には1991年4月に商学部助教授としてご赴任，そして翌1992年4月に教授に昇任されました。1997年4月，経済科学部が開設されると，同学部経済情報学科教授として「法情報論」等を，さらに経済科学研究科博士前期課程・博士後期課程では「情報社会研究」，「情報社会特殊研究」，「特殊研究指導」等を担当され，本当に多くの大学院生をご指導くださいました。また，北原教授は教養科目の「情報社会論」等も担当くださいましたが，受講者が大教室から溢れるほどの大人気でした。語学にもご堪能で，ドイツに留学された折の話，あるいは国際学会で *chairman* を務められた際の話など，大変楽しく聴かせていただきました。冬には皮のジャケットとジーンズをお洒落に着こなされ，*dandy* そのものでした。

廣光教授は1969年3月に広島大学工学部を卒業，1973年3月に同大学大学院工学研究科博士後期課程を修了され，呉工業高等専門学校や福井大学工学部等のご勤務を経て，1989年4月に本学商学部教授として赴任されました。この間，1978年10月に名古屋大学において工学

博士の学位を取得されております。1997年4月、経済科学部経済情報学科教授にご就任くださいましたが、商学部管理科学科時代から本学の情報教育にご尽力くださり、経済科学部開設とほぼ同時期、情報センターの開設そして6号館への移転に多大な貢献をいただきました。学部では「システム科学入門」、「マネジメントシステム論」等を、大学院では「環境情報システム研究」、「環境情報システム特殊研究」、「特殊研究指導」等を担当され、経済科学部・経済科学研究科の教育研究にご尽力くださいました。また、2002年4月～2006年3月および2010年4月～2014年3月に経済科学部長を、2006年4月～2010年3月には本学副学長を務められ、教育研究のみならず、学部運営・大学運営の面でも極めて顕著な功績を残されました。私も教務主任時代から廣光教授には様々なご指導を頂戴しております。廣光教授が合計8年間、経済科学部長の職にあられたことは本学部の発展の大きな要因であると確信いたしております。

藤田教授は1970年に北九州大学商学部を卒業、1977年に立教大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得、1976年10月から秋田短期大学にご奉職後、本学には1996年4月に商学部教授として赴任されました。1996年9月には立教大学より博士（経済学）の学位を取得され、翌1997年に学部開設にともない経済科学部教授に就任いただきました。学部では現代経済学科の専門科目「経済史」や教養科目「西洋史」等を、大学院経済科学研究科では「西洋行財政制度史研究」、「西洋行財政制度史特殊研究」、「特殊研究指導」等を担当されました。『帝国主義期イギリス海軍の経済史的分析 1885～1917年』を始め、多数の研究書を出版なされております。教授会の前後、ご所属の現代経済学科のみならず、経済情報学科の先生方とも親しく話されていた姿が大変印象的でした。

以上、4名の先生方には、2017年4月に本学より名誉教授の称号が授与されました。先生方のご健勝とご研究の一層の発展を祈念して、献辞とさせていただきます。